様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23　年　5　月　30　日現在

機関番号：14501
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2007　～　2010
課題番号：19510252
研究課題名（和文）　島嶼国ツバルにおける環境破壊とそれに対する適応戦術に関する文化人類学的研究
研究課題名（英文）　Environmental Disruption and People's Tactics for Living in Tuvalu.

研究代表者
吉岡　政徳（YOSHIOKA MASANORI）
神戸大学・大学院国際文化学研究科・教授
研究者番号：40128583

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は、大きくは以下の二点を明らかにしたことである。（１）ツバル周辺の海面が上昇傾向にあるかどうかについて確かなことは言えず、ツバルで生じている環境破壊は温暖化によるものではなくグローバル化によるものであるという点。（２）ツバルの人々が現在直面している環境変化にうまく対処するために、人々は、グローバルをローカルに取り込むことで「変化したもの」も「伝統」であると位置づけ、どんな変化もローカルな概念の中で生起していると捉えるローカル中心の独自な適応戦術を用いているという点。

研究成果の概要（英文）：The result of this study is to have clarified the following two points: (1) It is not certain that the rate of sea level rise in the Tuvalu region is accelerated for recent years, while it is certain that the environmental disruption developed in Tuvalu is not because of the sea level rise caused by the global warming but of so-called globalization. (2) In order not to be seriously influenced by the present environmental disruption, people in Tuvalu is using a unique tactics for living that they consider even the violent change caused by the globalization to be occurred in their traditional local way of life, thinking that the changed tradition is also their own one.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総　計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：複合新領域
科研費の分科・細目：地域研究
キーワード：島嶼、環境破壊、ツバル、適応、戦術

１．研究開始当初の背景

(1)太平洋にある総人口 1 万人程度の超ミニ国家・ツバルでは、海岸侵食が進み、地中から海水が噴出する水害に見舞われ、小さな島は海面下に水没するなどの現象が続いている。こうした自然環境の破壊は、グローバルな規模で起こっている環境破壊と連動していることは間違いなく、ツバルは、いわば自然破壊のグローバル化の波に飲まれているといえる。しかも、ツバルのような小さな国では、この自然破壊を契機として、もう一つ

の大きな問題が生まれている。それは、社会・文化環境の急速な変化である。それまで、世界にほとんど知られていなかったツバルが、この自然環境問題で世界的に有名になったことにより、世界中のマスコミ、NGO 団体、調査団、さらには観光客まで毎年押し寄せるようになったのである。そのため、ツバルの社会・文化環境は、急速に変貌を余儀なくされている。

(2)自然環境の破壊をめぐる議論は、様々な分野で行われている。海面上昇に関しては、オーストラリアの国立潮位センターから毎月報告書が出ており、それらに関して多くの議論が行われてきた。また、サンゴ礁の性質に関する議論からツバルの水没問題を論じようとする研究もある。しかし、自然環境の破壊に人々がどのように対処しえいるかという研究になると、皆無であった。

(3)一方、社会・文化環境の変貌という点に関しては、多くの文化人類学的文献がある。そもそも社会変化、文化変化という問題は、非西洋世界が西洋世界と接触する過程で大きくクローズアップされ、続いて植民地化のプロセスとの関係でも論じられてきたことである。これらの問題は広く文化のグローバリゼーションの問題として位置づけることができるが、ツバルで現在進行している社会・文化環境の変化に関しては、議論が行われてこなかったということが現状である。

２．研究の目的

(1)本研究の目的は、自然環境が破壊され、社会・文化環境も劇的な変貌を余儀なくされている太平洋の島嶼国・ツバルにおいて、人々がいかにして変化に対応しているかを探り、その適応のための戦術を明らかにすることである。

(2)ツバルでは、NGO、調査団、旅行者などの多量の外来者の流入により、宿泊施設が急増し、英語でのコミュニケーションが広がり、商品の消費とそれに伴うゴミが増え、ツバル独自の生活が脅かされている。しかし、人々は、急激なグローバリゼーションの流れに巻き込まれつつも、それを受け止めながら、自らの伝統的やり方を維持しているのである。本研究は、こうした状況を踏まえつつ、変化への適応戦術を探る。それは、「文化のグローカリゼーション」研究の一翼を担っていると言えるが、ツバルのような特殊な状況のなかで、グローバルとローカルの関係の見直しを図ることも、本研究の目的となっている。

３．研究の方法

本研究は、大きくは以下の 3 つの方法によって行った。

(1)ツバルでのフィールドワーク

2007 年度と 2008 年度は、ツバルでのフィールドワークを実施した。

2007 年度は、8 月にフィールドワークを実施した。8 月は、地中からわき出る海水による洪水被害のない時期であるが、人々の環境破壊に関する関心、見解を聞くことができた。調査は首都フナフチにおいて行ったが、フナフチには各島からの移民が多く生活しており、土地所有者であるフナフチ島民のコミュニティと、土地を持たない他島出身者の移民コミュニティ双方で、環境破壊に対する適応戦術についての聞き取り調査を行った。

2008 年度は、2 月から 3 月にかけてツバルおよびニュージーランドにおいてフィールドワークを行った。この時期は、ツバルでは一年の中でも最も海面が高くなる時期であり、今回は首都フナフチで海面が約 3mの上昇となった日に、地中から海水がわき出る現場を目撃することができた。しかし人々は、こうした自然災害に対して驚くこともなく、通常の生活を送っている現状が存在した。

一方社会的環境破壊の問題としてクローズアップされているゴミ問題の調査も行った。首都のフナフチでは、収集したゴミは島の北の端に運ばれ積み上げられるが、年々増加の一途をたどっている。しかしそれらのゴミはときどき「野焼き」することで量を減らしている現状が明らかになった。ところで、ツバルは、自然環境破壊による環境難民の受け入れをニュージーランドなどに要請したが、環境難民という概念は受け入れられず、労働移民としてのみ受け入れが行われているのが現状である。2008 度は、ツバルからの帰路、ニュージーランドに立ち寄り、ツバルからの移民が多く暮らしているオークランド市西部のマセー地区で調査を実施し、移住者の実態について情報を集めた。

(2)アメリカとイギリスにおける文献調査

2009 年度は、9 月にニューヨークのコロンビア大学の図書館で、ツバルおよび同地域の環境破壊に関する文献調査を行った。まず、Butler Library で、Lewis 著 Sea-level rise: Some implications for Tuvalu (1989)、Maragos, Baines, and Beveridge 著 Tropical Cyclone Bebe creates a new land formation on Funafuti Atoll(1973)などを通して、台風による自然環境破壊の情報を収集した。また同図書館で、McQuarrie 著の *Strategic Atolls: Tuvalu and the Second World War*.(1994)を読み、この著書からは、ツバルで現在洪水被害が生じている場所と第二次大戦時にアメリカ軍が滑走路建設のために採掘したボローピットの位置とが重なっていることの証拠が得られた。さらに、Geology Library で、Royal Society of London 編纂の *The atoll of Funafuti* (1904)を読むこと

が出来た。この中に 1986 年のフナフチ探検に関する報告があり、その段階でフナフチ内陸部は満潮時には海水が湧き出てくることが分かった。

2010 年度は、11 月から 12 月にかけて、イギリスのロンドンでツバルの自然環境に関する文献資料や植民地統治期の文献資料を調査した。これまでの 3 年間の研究で、ツバルで生じている自然環境破壊の原因が、温暖化による海面上昇であるというよりも、グローバル化による社会環境の変化にあるということが分かったが、こうした点を踏まえ、自然・社会環境の破壊とグローバル化の関連をさらに明確にすべく、まず、Royal Society of London の図書館で、Rodgers の An Annotated Bibliography of the Natural History of Tuvalu(Ellice Islands)(1985) や Ohde らの *The chronology of Funafuti Atoll: revisiting an old friend*.(2002)を読み、自然環境破壊の経過を確かめた。次に British Library では、イギリスの植民地期の資料に焦点をあわせ、Mrs. David の *Funafuti or Three Months on a Remote Coral Island*(1913)、W.Wyatt Gill B.A.の *Jottings from the Pacific*.(1885)、そして統治行政に関する雑誌である *Journal of Administration Overseas* を調べ、植民地化に伴うグローバル化の中でのツバルの伝統とその変遷を探求することができた。

(3)国内の研究者との研究打ち合わせ、資料収集

2007 年度は、サンゴ礁島における環境破壊について、2008 年度は、海面上昇とツバルの洪水被害との関連について、2009 年度は、環境破壊の日常を暮らす人々の生活戦術について、2010 年度は、ポリネシア諸社会における変化に対する適応について、研究者達と意見を交換し、議論した。また、環境破壊、温暖化、海面上昇、グローバリゼーション、植民地化に関連する図書を購入するとともに、国内の大学図書館などで資料を収集した。またオーストラリアの国立潮位センターのデータを収集し、分析を実施した。

４．研究成果

(1) ツバルの被害は温暖化による海面上昇ではない。

オーストラリアの国立潮位センターのデータを詳細に吟味すると、ツバル周辺の海面が上昇傾向にあるかどうかは確証できないといことが分かった。しかも、それらのデータが示しているのは、ツバルでの洪水被害を引き起こす高い潮位は、ここ 10 年ほどの間に始まったわけではないということを示していた。そして文献調査の結果、こうした被害は少なくとも 19 世紀には生じていたということがわかったのである。つまり、ツバルにおいて生じている被害は、地球温暖化に伴う海面上昇が原因であるとは言えないということなのである。山野らは地形図の比較研究から、もともと人間の住んでいいなかった洪水発生地域に、人口増加とともに生活圏が広がり、その結果、被害が生まれるようになった、と主張しているが、様々な文献調査はこの視点を裏付ける結果となった。

(2) ツバルにおける被害はグローバル化によるものである。

ツバルにおける人口増加が主たる原因であると言うことは、現在の被害がツバル自身が招いたというように誤解されてはならない。ツバルにおける人口増加は、植民地化、第二次世界大戦の基地、独立という広い意味でのグローバル化によってもたらされたのである。そして、こうしたグローバル化に対処するツバルの姿勢が、フィールドワークによって明らかになった。

(3) ツバルにおける伝統概念は伝統と近代の対立を乗り越える柔軟さを持っている。

ツバルには、「伝統」を意味するファイファインガという概念があり、ファイファインガ・ファカ・ツバルとなったときには、過去から現在まで様々な変化を受けて変遷してきたツバルの「やり方」すべてを指す概念ともなっている。つまりそれは、「ツバルのやり方」「ツバルの伝統」という流動的で柔軟な概念となる。ツバルでは、キリスト教が入ってくる前は多神教的な信仰を持ちマナという超自然的な力に対する信仰を持っていたが、キリスト教によってそれが激変した。しかし、ツバルでは、伝統は消滅したとは考えない。というのは、新しく西洋世界から入ってきたキリスト教に基づく生活はファイファインガ・ファカ・ツバルだからである。人々は言う。「我々は教会の教えに従って現在生活しており、我々は教会を信じているから、それはファイファインガなのだ」と。「ファイファインガ・ファカ・ツバルとは、ツバルらしい生活の仕方であり、教会だけではなく学校もみんなが当たり前に勉強するところだから、ファイファインガなのだ」と言う。つまりツバルでは、これら教会も学校も、現在のツバルの人々の生活に根をはっているから「伝統」なのだというのである。

しかし、現在の自分たちの生活に根付いていることでも、嫌なことだと考えれば、それをファイファインガの範疇から排除することもある。たとえば、貨幣経済の浸透によってフナフチは「お金」に毒されたと西洋化を批判的にみるフナフチのチーフは、お金を使う生活はファイファインガではないという。

さて、環境破壊というのは、その言い方からしても、プラスのイメージをもたらさない。従ってツバルの人々も、環境が破壊されてい

るという視点から現在を捉えれば、破壊された環境での生活をファイファインガとは捉えないかもしれない。評価できないもの、嫌なものは、自分たち流の概念から外れることは十分に考えられるからである。しかし、環境が破壊されたという捉え方ではなく、環境が変化しているという捉え方をすれば、その中で、自分たちにとってプラスの側面を見出し、その結果生まれた現在の生活をファイファインガ・ファカ・ツバルと捉えるであろうことになる。マイグレーションはファイファインガ・ファカ・ツバルと捉えられているが、環境が破壊されたから移住せざるをえなくなってニュージーランドへ移り住むという語り方をすれば、マイグレーションはファイファインガとはならない。それは、歓迎すべきことではなく、変化の中でも「嫌なもの」ということになってしまうのである。しかし、ニュージーランドへ労働者として働きに行く、あるいは他の国に新しい生活を求めて移住するという捉え方をすれば、それは現在のツバルの人々の生活に根付いていることであり、マイグレーションはファイファインガ・ファカ・ツバルとして位置づけられることになる。つまり、ツバルの人々はポジティヴ・シンキングの中に「ツバル流」を作り上げているということなのである。

だからこそ、現実に自然環境が破壊されているとしても、あるいはグローバリゼーションによって社会環境が激変したとしても、それらをネガティヴにとらえずに、変化の中に自分たちが評価できるものを見出し、「変化する伝統」概念を武器に、変わりゆく環境に適応しているのである。

(4) ツバルの適応戦術は、グローカリゼーションを越えた戦術である。

ツバルの人々の伝統概念を支えているのは、伝統は絶えず変化するという信念である。「ファイファインガという概念は、昔から今まで全部をひっくるめているのだ」というツバルの人の説明は、この点を明確に表している。伝統と近代を二つに分けて、近代という怪物が侵入してくることによって伝統が無くなってしまった、という位置づけをすることは悪いことではない。自分たちの独自性を過去に求め、それに立ち返ることで現在の状況を反省するという視点が重要なこともある。しかしツバルでは、過去から現在までが連続していて、譬え、西洋のシステムが導入されようと、人々は、それを受け入れ、しかも、ツバル流に手直しする形で自分たちの中に取り込むという姿勢を持っているのである。伝統と近代、オセアニアと西洋は対立するのではなく連続していて、そしてその連続した姿が「ツバル流」に消化されることによってツバルの伝統が形成されていると捉えるのである。つまり、ツバルの場合は、グローバルをローカルに取り込むことで「近代」も「伝統」であるという対処を行っている。これは、グローバルな波をなんとかローカルな枠で捉えなおそうとする「グローカリゼーション」を超えた反応であり、どんな変化もローカルな概念の中で生起していることであると考える、ローカル中心の独自な適応戦術であると言える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５　件）

①吉岡政徳 2010　「ツバルにおける環境破壊（その 3)『会報ツバル』36:1-4.
②吉岡政徳 2010　「ツバルにおける環境破壊（その 2)『会報ツバル』35:1-4.
③吉岡政徳 2010　「比較主義者ニーダムの比較研究」出口顕、三尾編『人類学的比較再考』国立民族学博物館 90:79-96.
④吉岡政徳 2010　「ツバルにおける海面上昇問題」『国際文化学研究』34:47-70.
⑤吉岡政徳 2009　「ツバルにおける環境破壊（その 1)『会報ツバル』34:1-4.

〔学会発表〕（計０　件）

〔図書〕（計３　件）

①吉岡政徳　2011『島嶼国ツバルの現実』神戸大学大学院国際文化学研究科
②吉岡政徳、石森大知(編著)　2010『南太平洋を知るための 58 章』明石書店
③吉岡政徳（監修、著）2009『オセアニア学』京都大学学術出版会

〔その他〕
ホームページ等

http://web.cla.kobe-u.ac.jp/staff/yoshioka/tuvalu.htm

６．研究組織
(1)研究代表者
吉岡　政徳（YOSHIOKA MASANORI）
神戸大学・大学院国際文化学研究科・教授
研究者番号：40128583

(2)研究分担者
(3)連携研究者